

被虐待体験をもつ高校生のロールシャッハ反応に関する臨床心理学的研究

心理臨床学専攻 山入端 香

I. 問題と目的

養育者による虐待という行為は、子どもの成長や発達にさまざまな否定的影響を与える。それは、外傷後ストレス障害（PTSD）の症状の枠組みを越えて、対人関係や、感情の調整能力、自己像や他者像にも大きな影響を与え、逸脱行動を引き起こすまでになることがある。また、これらの影響は、その後のケアによっては、人格の内部にまで浸透し、人格に歪みをもたらす恐れさえある。特に、乳幼児期から虐待を受ける子どもが、心身ともに発達の過渡期である青年期を迎えるときには、虐待によって未解決のままとなった乳幼児期の母子関係での問題が再燃し、その結果、青年期特有の不安と葛藤と重なって、波瀾に満ちた青年期となる。

このような虐待という心に傷を抱えた子どもたちに対して、適切なケアや治療を提供するために、虐待を受けた子どもたちの心理的特徴を、客観的なアセスメントを用いて明らかにすることは、役立つと思われる。アセスメントツールの中でも、ロールシャッハ・テストは、外傷的出来事を直接聞き出すことなく、個々人の内面世界を反映し、外傷体験によるとと思われる内的混乱を探求できるものと考えられる。しかしながら、わが国において、ロールシャッハ・テストを用いた被虐待児に関する研究は少なく、そのほとんどが、小学生～中学生の子どもを対象にしたものであり、人格形成の重要な時期とも言える青年期、特に高校生を対象にした、被虐待体験をもつ子どもに関する研究は見受けられない。

よって、本研究では、高校生を対象に、ロールシャッハ・テストを用いて、青年期を迎えた被虐待体験をもつ子どもの心理的特徴を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

(1) 対象

被虐待経験をもつ児童養護施設入所中の高校生8名（男子5名、女子3名）を対象とした。平均年齢は16.6歳で、平均入所期間は52.1ヶ月（4～194

ヶ月）であった。

(2) 手続き

著者が検査者となり、施設内の心理室にて、個別にロールシャッハ・テストを実施した。教示、質疑等は名古屋大学式（以下、名大式）に従った。調査時期は平成20年8月8日～8月29日であった。

(3) スコアリング

スコアリングに際して、筆者と20年以上の経験をもつ2名の臨床心理士が合議し、スコアリングの統一をはかった。

(4) 分析方法

先行研究における一般成人や、一般中高生との比較を通じて、形式分析を中心に質的なものも含めながら検討した。

III. 結果と考察

(1) 現実吟味力・知覚の確かさ・自我の強さ

被虐待体験をもつ高校生は、総じて、F+％やR+％が低いことから、現実吟味力が低いことが示唆された。現実吟味力が低いということは、物事を客観的に眺めたり、冷静に場面を対処する能力が低いことを意味する。虐待を受けた子どもたちは、いつ何時に、虐待という行為をもたらされるかを予測できないため、常に警戒し、注意を払ってきたと思われる。そのような子どもたちが、物事を、じっくり冷静に、客観的に眺めて、対処する時間などはあるわけもなく、そのような術を身に着けて来なかったことは容易に想像ができる。

(2) 情意統制の側面

被虐待体験をもつ高校生は、情意的統制の側面において、外的刺激には抑圧的、抑制的で、内的な情動の統制は悪いということが示された。これはつまり、外的な刺激には、その情緒的動揺を否認・抑圧して、あまり感情を伴わず、反対に内的な情動は、抑制できず、即時的な欲求の充足を延期させる力が未熟であるということを意味する。西澤（1999）は、虐待を受けた子どもは、何の痛みも感じなくなり、慢性化すると全般的な無感情状態に陥り、自分の感情や感覚が持てなくなると述べており、このような症状が、本研究の高校

生にも、外的刺激の統制の強さとしてあらわれたと思われる。そして、内的な統制の未熟さについても、西澤（1999）が述べるような、乳幼児期の不適切な母子関係に起因する感情調整能力の欠如の状態を映し出しているものと思われる。さらに、この外的な統制の強さは、男子において顕著で、女子においては、抑制しながらも感情表現はされており、内省や自己洞察も行えることが示唆された。このような性差が見られたのは、青年期を迎えた高校生ならではの結果であると思われる。被虐待児に関する先行研究で、男女差が見られた結果はないが、そもそも、そのほとんどが児童期の調査であり、第二性徴を迎え、心身ともにはっきりした性差があらわれる青年期を迎えた高校生を対象にした本研究で、その反応に性差が出てもおかしくないと考えられる。また、被虐待体験をもつ小学生を対象にした坪井（2007）では、外的刺激への反応性が高いことを示唆しているが、本研究ではその逆の結果がみられた。この違いは、小学生と高校生という発達の違いが大きく影響していると思われる。それは丁度、西澤（2008）が述べる、反応性愛着障害が、青年期以降に、無差別に愛着対象を求める脱抑制型から、誰とも必要以上の情緒的結びつきを持つことができない、心理的孤立の状態の抑制型に移行することと類似している。青年期を迎えた高校生は、外的刺激に過剰に反応することをやめ、外界からの刺激から自らを離し、抑制することで自己を保っているのかもしれない。

（3）対人関係の側面

本研究において、被虐待体験をもつ高校生の中には、人間反応・人間運動反応が皆無で人間に関心が無く、共感性に欠ける者と、それらが多くみられ、極度に人間に過敏で、気にしすぎる者がみられた。人間に関心が無く、共感性に欠ける者は、先に挙げた西澤（1999）のいう、PTSDの「麻痺」が慢性化した場合に見られる、全般的な無感情状態の結果、自他の感情や感覚をも感じることが出来なくなり、共感性の欠如につながったものと思われる。一方、極度に人間に過敏で、気にしすぎる者は、根深い対人不安がみられ、人間に関心があるが、うまく距離がとれず、依存的な感情を伴ったり、防衛的になっていることが窺えた。これも、虐待のために、母子関係という最も対人関係の基礎の部分で躓いてしまい、その結果、対人関係の

基礎を持たぬままいることで、今も尚、対人不安を抱えているものと思われる。

また、この不安感情は、本研究の被虐待体験をもつ高校生全体が、高い割合で持っていることが示唆された。さらに、一個人において不安感情は、カテゴリー内のさまざまな下位項目を含んでおり、このような根深い不安は、虐待が与える最も深刻な影響であると思われる。そして、被虐待児にみられる多くの問題行動や、生活上の支障のほとんどが、この根深い不安感情を基としてあらわれているように思われる。先に挙げた、対人関係上に困難をもたらす対人不安も、彼らの見せる多くの逸脱行動も、そのやり場のない不安や満たされない感情が、社会的には適切でない方法で現れてしまっているものと思われる。

加えて、本研究では、彼らの両親像、自己イメージとして、男子は、両親像は、一般的な単純なイメージにとどまり、自己イメージは曖昧なものになっていた。これは、虐待によって、両親との関係が希薄であったことを物語っている。一方、女子においては、内省性や自己洞察がある程度あるため、両親像は実際のものに近く、愛情欲求や不満、願望を重ね合わせて表現しており、自己イメージは、曖昧である自己を意識したものが多くいながらも、自己と懸命に向き合っている様子が窺えた。これは、一般に青年期においてみられる自己の確立を目指すものであり、健康的な側面であるといえる。

IV. 展望

本研究では、被虐待体験をもつ高校生の心理的特徴がいくつか見出されたが、本研究の結果のみで、被虐待体験をもつ高校生の心理的特徴を語ることはできない。今後は、筆者が検査者としての鍛錬に励むと共に、対象者を増やし、基礎的な研究を重ねていく必要があるといえる。

<引用文献>

- 西澤哲（1999）：トラウマの臨床心理学 金剛出版
- 西澤哲（2008）：トラウマが子どもに与える影響：虐待と心の傷 教育と医学, 56(5), 4-14.
- 坪井裕子・森田美弥子・松本真理子（2007）：被虐待体験をもつ小学生のロールシャッハ反応 心理臨床学研究, 25(1), 13-24.